

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 イーブリン・ウォー 『回想のブライズヘッド』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

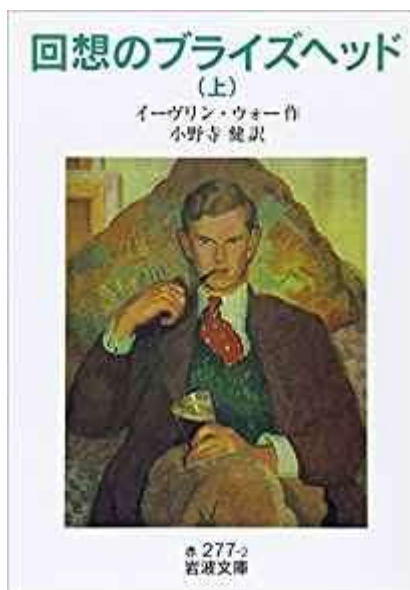
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 63 回のツイキャス読書会の課題図書は、イーブリン・ウォー 『回想のブライズヘッド』です。
読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

(訳者の小野寺健さんが 2018 年 1 月 1 日お亡くなりになりました。ご冥福を祈ります)

「回想のブライズヘッド」を読んで

私の住んでいる国ではこの本の翻訳が絶版されてしまい、半分読書会参加を諦めていたが、昨日国立中央図書館で「オックスフォードの放浪者たち」というタイトルでたった一冊保管されていることを発見し、辛うじて読むことができた。ものすごいスピードで拾い読みをしたので、じっくり作品を味わうのは難しかったが、第1部のチャールズの大学生活の様子がとても魅力的で、ほのぼのした雰囲気ですぐ夢中になってしまった。自分は結構シャイな性格で、あんなヤンチャぶりができないタチなので少し羨ましさを感じた。

閑話休題、この作品を読みながら感じたのは、チャールズとセバスチャンの間で醸し出されるケミストリーが後半に出てくるジュリアや妻との関係より強いということである。ブロマンスとでも言おうか、グレイト・ギャツビーで書かれている男同士の微妙な感情の流れが連想された。

思うに、この作品から出てくる女性は皆感情的か宗教的か肉感的か、ある方面へ極端に偏っていて、彼女らとは深く話し合うことができない気がする。もちろん友達のセバスチャンもアルコール中毒でヘタレな奴ではあるが、チャールズはセバスチャンの心の奥底にある堅い芯の部分を見出し、彼を救おうとしたり、手伝うのである。しかし結局セバスチャンを見限ってしまったチャールズはその代理としてジュリアと仮初めの愛を楽しむが、それは恐らく「放浪者」としての姑息な気休めに過ぎないであろう。

愛、友情、時代から流される訳でもなく、縋り付く訳でもない彼が選んだ道は軍人として生きることであった。しかし、それで彼は何かを掴んだらうか。否、彼はただ単に枯れているだけである。そうやって居場所も目標も見つからず、不毛な人生を歩む。

しかし、不思議にもこの作品はそういう不毛な生活をたいそう美しく演出するのを可能としたのである。この本にはいい表せないような魔力がある気がする。それをちゃんと理解できる日が来るだろうか。まだまだ読解力が足りない自分が恥ずかしい。

(おわり)

『アロイシ阿斯を捜して』

私は前回、途中までしか読めなかったので、次回の読書会の時までには全部読みたいと思っていて、今回全部読むことが出来てそれにまず、満足しました。

前回は、セバスチャンの大切にしていた熊のアロイシ阿斯はどうなったのか、すごく気になりながら分からなかったので今回はそこをとくに注意しながら読みました。

岩波文庫上巻 P203 第5章にこう書いていました。

ティベアのアロイシ阿斯も、まるで宣教師が取り出さないで行方不明になった呪い物がそれきり忘れられてしまうように、セバスチャンの寝室の筆筒の上に放り出されたままになっていた。

わりと最初のほうで見つかって私は、どこを読んでいたのか？ 読み飛ばしすぎていた事を反省しました。

あんなに大切にしていたのにどうしてなのかなと少し考えてみました。

チャールズは青春の思い出をブライズヘッドに置いて来たように、セバスチャンにとっての大切な時間は、大学のコレッジに居たころ、チャールズと過ごした青春の日々の思い出の象徴がアロイシ阿斯だったのかな？

もう、今ではあの楽しかった頃には戻れないという意味でアロイシ阿斯が置き去りになってしまったのかな？ と思いました。

チャールズは、学生時代に自分の進む道を見つけられたけど、セバスチャンはどう生きていけばいいのか自分の道を見つけられなくて苦しくてお酒に溺れるしかない辛さが今回は伝わってきました。

その後は、他人からみたらセバスチャンは可哀相な生活をしていて不幸に見えるかもしれないけれど、母親の思うようにしか生きられなかった時に比べたら幸せなのかもしれないなと思いました。

置き去りにされたアロイシ阿斯は、その後の住人が専用のブラシでとかしたりして、可愛がってくれてたら良いなと思うけど、男性寮だからそれは無理かな？

(おわり)

「子犬物語」

ママは毎晩枕もとで本を読んでもくれる。僕が本嫌いなのも知らないで。「今日は、成年に合わせて『子犬物語』を読むわね。始まり始まり。。。」

「昔々、お城のような大きなお屋敷に犬が4匹飼われていました。飼い主の女性は、よい犬になって欲しいと願い、どの犬も大切に飼いました。けれど、一番下の子犬は言うことをきかないことが多く、勝手に遊びに出かけたり、女性の知らない犬の友達を連れてきたりしました。時には飼い主に吠えたりすることさえありました。そんな時でも女性は、「自分のしつけ方が悪いのね、きっと。」と言って、子犬を叱ることはありませんでした。

女性はよく教会に子犬を連れて行きました。子犬が変わると思ったのです。でも変わりませんでした。かえって、教会から帰った後の子犬はよく吠え、普段は大事にしている熊のぬいぐるみを乱暴にけったりしました。それから勝手に遊びに行くことが続きました。でも必ず家に戻ってきました。

ところがとうとう、何日経っても帰って来なくなりました。居場所が分からなくなりました。

女性はしばらくして病気になってしまいました。女性は子犬に会いたがりでした。少したって居場所がわかりました。でも子犬はそこから動こうとしませんでした。子犬は足の不自由な男の人に飼われていました。男の人のために一生懸命お手伝いをしているようでした。話を聞いた女性は同情してお金をずっと送ることにしました。

それから女性が亡くなり、何年か過ぎて男の人も亡くなると子犬は姿を消しました。

そして、長い長い年月が過ぎました。

ある古い教会に子犬はいました。子犬はもう老犬になっていました。この教会に住み着いて、痩せて弱った体を手当てしてもらいながら、可愛がられていました。まだ時々、言うことをきかないこともあるようですが教会に怒る人はいませんでした。めでたしめでたし、お終い。」

ママは読み終わると「ずっと女性の言うことをきいてお屋敷にいればよかったのにね。」と付け加えると部屋の明かり消して出ていった。

でも僕は、子犬の気持ちが分かる気がした。

「読んでみよう。」僕は、本を手にとると表紙をめくった。そこには「セバスチアン作」と書かれていた。

(おわり)

『回想のプライズヘッド』 読書感想文

生きるという事と、宗教が絡み合う感覚が、なかなか想像力が及ばないから、もどかしい。

セバスチアンの母親はカトリックだが、母の行動や立ち振る舞いが厳格なカトリック精神に基づくものなのかどうかも私にははっきりわからなかった。なんとなく感じたのは、母の厳格さに夫も子どもたちも耐えられなかった。マーチメイン婦人自身も、何もかもがうまく回らなくなった苦しみを自分自身が結果的に抱え込まなければならなかった。というサイクルだ。

チャールズが、セバスチアンに、お酒に回る事を承知でお金を渡す場面がある。あるいはチャールズが、マーチメイン夫人の死期が近づいている事をセバスチアンに知らせるためにモロッコを訪ねるシーンがある。どちらも男性の旧友ならでは抱擁力ある対応に私は心を打たれた。マーチメイン夫人がセバスチアンをチャールズに任せてしばらく放っておくことが出来れば良かったのに、と思った。

「ねえ、チャールズ」「生まれてからずっと他人に世話をしてもらってばかりいたものが、誰か他人の世話をできるようになるというのは嬉しいものだよ。」

この言葉に、私はセバスチアンの本質を見たような気がした。自己承認を得るのが、彼にとって、どんなに大切なものだったか。切ないまでに求める気持ちを感じて、心打たれてしまった。

苦手な宗教背景を、これまで逃げてきたのですが、きちんと理解して海外文学を読むにはとても良い小説に思えました。現在第3部第1章までしか読めなかったので、今夜10時までに読了して、ツイキャス読書会に臨みたいと思います。

(おわり)

belougaさんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelougaのつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 神に愛される 』

セバスチャンの破滅的な人生を辿るにつれ、なぜか『沈黙』(遠藤周作著)のキチジローが頭に浮かんだ。キチジローは、ポルトガル人司祭ロドリゴを何度も裏切りながら、彼に赦しを請う。私は、「司祭を裏切るなんて！ 神をも裏切るのも同じだ！」と『沈黙』を読みながら、何度も憤っていた。しかし、理解していなかったのはキリスト教観のない私の方だった。マーチメイン侯爵の臨終に立ち会った司祭はいう。「キリストは、正しい人ではなく罪ある人を悔いあらためさせるために、おいでになったのです。」(第三部・第五章・P365)

『罪と罰』のラスコーリニコフとソーニヤしかり、罪を犯した人をありのまま悔いあらためさせることこそが「神の愛」だった。カトリックを避けていたマーチメイン侯爵の「死に対する非常な恐怖」を取り去ったのもやはり「神」だ。信奉するから救われるのではなく、罪のある人を救うという神の愛に、人間は太刀打ちできない。神の愛を目の当たりにしたジュリアが、信奉のないチャールズとの別れを選択するのも必然だろう。罪を重ねれば重ねるほど、ジュリアには神が必要で、「神の慈悲を閉め出すことはできません。」(第三部・第五章・P373)

セバスチャンも、マーチメイン夫人の信奉から逃げるようにカトリックから距離をとり、アルコール中毒を伴った放蕩生活を送る。神に見捨てられたかのようなのだが、カトリックを避けていたマーチメイン侯爵、離婚歴のあるレックスと結婚したジュリア共々、神の御許に戻る。だからこそ、チャールズがブライズヘッドに再訪した際、荒れ果てた屋敷とは反対に、礼拝堂は少しも荒れていなかった。そして、チャールズは覚えたばかりの祈りの言葉を唱える。セバスチャン、マーチメイン侯爵、ジュリア、チャールズは、神を愛していなかったからこそ、神に愛されたのだ。

「ああいう人は神に非常に近いところにいる、神に愛されているんだと思うの。」(第三部・第四章・P311)とのコーデリアの言葉を、かつてテディベアを抱いていたセバスチャンのために信じたい。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『盥に星が映るような零落の生活』

折口信夫の『[反省の文学源氏物語](#)』にこういう一説がある。

(引用はじめ)

人によっては、光源氏を非常に不道德な人間だと言うけれども、それは間違いである。人間は常に神に近づこうとして、様々な修行の過程を踏んでいるのであって、其ためには其過程過程が、省みる毎に、あやまちと見られるのである。始めから完全な人間ならば、其生活に向上のきざみはないが、普通の人間は、過ちを犯した事に対して厳しく反省して、次第に立派な人格を築いて来るのである。光源氏にはいろんな失策があるけれども、常に神に近づこうとする心は失っていない。

(引用おわり)

光源氏が、宿命に翻弄されて、さまざまな女性と関係をもつのは、一段回ずつ神の領域を踏んでいるのだという。源氏は『蓬生』で、庭に蓬が生い茂り、盥に星が映るような零落の生活をして、世間から忘れ去られていた末摘花が、自分をひとすじに信じていてくれたことに感動する。

(引用はじめ)

「こういう所には金の壺を埋めておきたくなる」と、セバスチャンはいった。「ぼくは自分が幸福な気持になったところにはみんな金の壺を埋めておいて、いまに年とって醜いみじめな老人になったら、もどってきてそれを掘り出して、思い出にふけりたいと思うんだ」 上巻 P.46

(引用おわり)

神がいるとしたら、気まぐれに人間を作って、遊んでいるうちに、そのまま忘れてしまったのかもしれない。残された人間は、自分が神と遊んでもらったときに感じた小さな幸せを金の壺に入れて埋めておかないと、誰にも相手にされなくなってからさみしくて死んでしまう。たまに金の壺を掘かえて大切なものを思い出すのだ。セバスチャンに忘れられたアロイシアスも、源氏に忘れ去られていた末摘花も、金の壺を守る天使のようだ。あやまちだらけの私たちの人生にとって、大切なものを守ってくれた天使。

人は罪深く、あやまちは避けがたい。苦しみ原因は人からは測り難いから救ってやることもできない。苦しみを抱えながら生きるセバスチャンは、光源氏と似た軌跡を描いて、神に近づいている。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343